

# 未来を担う子どもたちが 期待と希望を持てる地方創世に生きる



一番大切にしていることは「自分が何のために生きているのかという哲学」と言い切るのは、電子書籍取次市場で国内シェアNo.1の株式会社メディアドゥを始め、複数の会社を起業し代表を務める藤田恭嗣さん（48歳）。

木頭で生まれ育った藤田さん。名古屋の名城大学3年のときに携帯電話販売業で創業。大学卒業と同時にメディアドゥの前身である有限会社フジテクノを設立、'96年法人化。その後、'99年に株式会社メディアドゥを設立。'06年からは電子書籍事業に参入し、現在は電子書籍事業を中心に世界中に様々なコンテンツを届けるための流通プラットフォーム事業を展開している。

「読む」というと新聞や本など紙媒体に印刷された活字だった時代は遠くになり、現在はコンテンツによっては紙よりも画面で読むのが主流になりつつある。書籍も新聞もニュースもパソコンやスマートフォン、タブレットなどの画面で読む人が増えている。特にコロナ禍で自

宅学習やネットでの配信授業が増えた  
今、学校の教科書もタブレットで読む電  
子書籍が増えつつある。

この電子書籍に早くから先見の明を見  
出し、日本で出版社と電子書店を繋ぐ「電  
子書籍取次」として事業を円熟させたの  
が藤田さん。

そんな、いわば時代を最先端で引っ張  
るリーダー的存在の彼には、もう一つの

顔がある。

生まれ育ち、愛してやまない木頭への  
貢献。

子どもの頃から、高校が無い木頭を進  
学で離れたまま「雇用がないから」と村  
に戻ってこない人たちをたくさん見てき  
た。自身も、学校近くのシェアハウスの  
ような部屋に同じ境遇の高校生3人で共  
同生活をしながら、阿南市の富岡西高校

やすし  
実業家 藤田恭嗣さん  
株式会社メディアドゥ  
代表取締役社長 CEO

那賀町木頭にある  
“世界一美しいコンビニ”  
「未来コンビニ」



“四国のチベット”といわれる木頭。  
中央に那賀川が流れる。



に通った。大学は名古屋。そのまま起業  
し、東京に進出。

木頭は遠くにおいて思う故郷になっ  
てしまったかと思いきや。

「僕は木頭を創生したいと思っていま  
す。雇用を生み出すために、『黄金の村』  
『CAMP PARK KITO』『未来コンビニ』  
など複数の事業を作り、約60名ほどの雇  
用を生み出しています。」





でも、地方を創生していくためには、僕だけが何かをするのではなくて、僕以外の人が起点になってやっていけるようにしないと未来がない。そのためには、地方での起業家の育成と起業家の仲間を作ることが必要なんです。そうした環境作りの一環として、一般社団法人徳島イノベーションベース（TIB）を作り、徳島の人を中心に起業家に必要なことを学んでもらう取り組みをしています」

木頭は藤田さんのアイデンティティが根差す場所。

「僕としては、みんなに木頭の将来への期待と希望を持ってほしい。将来に可能性があると、新たな選択肢ができると思うんです。だから毎年、木頭学園で子どもたちへ講演をしたり、外国の方を木頭へお連れしたり、会社を作って雇用を創出したりしています。それによって、少

しも刺激を感じてもらえれば」

故郷では、子どもたちに「こんな村で一生終えるのではなく、出て行った方がいい」と言う親もいれば、「帰ってこい」と言う親もいる。

「もし親が、木頭には、こういう働き先と明るい未来への希望がある」と胸を張って子どもたちへ言えたら、結果はズいぶん違ってくると思います。僕はその希望の糸口を作るためにやっています」

藤田さんが最初に注目したのは木頭ゆず。『桃栗3年柿8年、柚子の大馬鹿18年』とも言われるように、柚子は実をつけるまで18年かかる果実。ところが藤田さんの父の時代、地元の研究会が研究と工夫を重ね、今では3年に短縮できる栽培方法を確立。もともと木頭の風土が柚子栽培に適していると高く評価され、その品質を認められていた「木頭ゆず」は全国に流通するようになり、国内外の料亭やシェフに愛されるようになった。

13年に設立した株式会社黄金の村は、かつて父が語った「この村を柚子で黄金色にして、もっと豊かにしたい」という言葉から名づけた。木頭ゆずを食用だけでなく柚子の花言葉「健康美」にフォーカスして、コスメや雑貨など、さまざまなカテゴリで商品化。国内だけでなくフランス、ドイツをはじめとした海外への

輸出も増やしている。

木頭への思いは、未来の主役となる子どもたちへも向けられる。未来を担う子どもたちへ、たくさんの文化や人生に触れ刺激を受けて、無限の可能性を広げてほしい、との願いを込めたコンセプト「子どもは未来から来た未来人」のもと2020年に作られたのが「未来コンビニ」だ。

人口1000人で過疎高齢化が進むこの地の、さらに居住人口200人の集落に、「世界一美しいコンビニ」をデザインコンセプトに設計された。コンセプトの背景と、地域のストーリーに密接に関わるデザイン設計が評価され、オープン2年目となる2021年には国際的なデザインアワードを連続受賞。2021年12月現在、なんと国内外の名だたるデザインアワード10冠に輝いている。

「ただ商品を販売する場だけとしてのコンビニではなく、誰もが気軽に集まれる交流の場としても機能するようカフェスペースも設置し、地元の方や旅行者の方のコミュニケーションが生まれています。今や木頭のシンボルの様な存在になっています」

藤田さんは、メディアアドゥの新入社員を必ず木頭に連れていく。2018年にオープンした「CAMP PARK KITO」



木頭ゆず

に宿泊しての2泊3日。座学もあるが、藤田さんの実家訪問もする。ご家族とも食事を共にし、自身が地元の人とどう接するのかも見せる。

「その姿を見ることは、自分が所属する企業の代表の、コアに迫ることですから」

木頭を知ることは、藤田さんを知ることと繋がっているのかもしれない。

藤田さんの原動力の源はやはり故郷を思う力。

「自分の可能性、選択肢を知った上で自分がどんな役割を担えば徳島に貢献できるのか、恩返しのできるのか、それを考えていくことが非常に重要だと思っています。」

今どこにしようが最後は徳島に住みたいし、子どもが生まれたら故郷で育てると決めています」

保育園の頃からワンパクだった。小4から始めた剣道の竹刀を分解して弓矢を作ったり、小学校から高校まで一緒だった仲良しの「虫博士」くんと一緒に虫を捕まえたり、二人で廃棄物の冷蔵庫をもらってきて分解、発電機を作ったり。人と違うことばかりしていた少年だったようだ。

「他人と比べられるのが苦手でした。僕には僕らしさがあるとも思っていました。僕から。だから、変わっている友人とばかり一緒にいましたね。その中で一番変わっていたのが、その虫博士。今は高校の理科の先生になっていて、今でも仲が良いですよ」

仕事の関係もあり、木頭にはしょっちゅう帰っている。

「木頭は終の棲家だと思っています。でも今は、故郷のことを思いながら自分の可能性を最大化すること、結果、幸せな人生はどこにあるのかを探究していくこと、これが一番大事なことじゃないかと思っています」

すでに現在、木頭での次の一手となる新規事業にもいくつか着手しているという。

「四国のチベット」とも言われるほど豊かな自然に囲まれた木頭の、自然環境への取り組みにも向き合おうとしている。



「木頭は標高も高く、川の上流にあって自然が豊かなところです。上流に元気があってこそ下流が潤います。僕は生まれた時から木頭の川で泳いだり、魚の生態系を見たりしているので思うことなんでしょうが、今は山も枯れて、川も枯れてきていると感じています。今、手を打たないと僕が死んだ50年後60年後においては大変なことになる。だからこそ、今後は自然環境にもフォーカスしたいと思っています」

冒頭の哲学の答えを見つけた気がした。

取材・文／北島由記子  
インタビュー写真／永井守